

巻頭言

木村 晶子

日本ギaskell協会は、ヴィクトリア時代に活躍した小説家、エリザベス・ギaskell (Elizabeth Gaskell, 1810-1865) とその関連分野の研究の促進、そして会員相互の親睦を目的として、1988年10月16日に発足いたしました。翌年が平成元年となったことを思い出せば、まさに昭和の最後に始まり、平成の30年間をととして学会として着実に発展してきたことになります。

周知のように、20世紀後半以降のフェミニズム批評やその後のジェンダー批評によって、英語圏における女性作家研究は飛躍的に発展しました。その中でもギaskellの文学研究の多様化、深化は特に目覚ましいと言えます。それ以前は「ミセス・ギaskell」、「ギaskell夫人」という呼称が一般的だったことからわかるように、その文学批評には過度な女性性が付与されてきましたが、この半世紀で、ギaskellの作品の独特の魅力と革新性にさまざまな角度から光が当てられるようになりました。新たな批評的視点による研究が年々増え続けていることから、ギaskellはまさに最も注目されている英国女性作家のひとりと言えるでしょう。

国内でも活発に研究が行われるようになり、本協会は、日本学術会議協力学術研究団体となっています。本学会創設においては、1985年設立の英国ギaskell協会 (The Gaskell Society) にご出席なさった初代会長の山脇百合子先生 (現在、実践女子大学名誉教授) が、国内でもギaskell研究の拠点となる学会を目指されたことがきっかけとなっています。そのため、英国ギaskell協会とも緊密な関係を保ちつつ、互いに研究協力もおこなっております。日本ギaskell協会の主たる活動は、本機関誌『ギaskell論集』の発行と会報『ニューズレター』の発行、年に一度の例会 (6月)、全国大会 (10月)、そして研究会 (主に奇数月) の開催です。

これまでの日本ギaskell協会の活動の成果としては、以下のものが挙げられます。まず、協会創立10周年を記念して、大阪教育図書株式会社より出版さ

れた『ギヤスケル全集』全7巻（1999-2006）があります。6年あまりの歳月をかけてギヤスケルの長編小説と中編小説を会員有志が翻訳したものです。次に、協会創立20周年を祝って、『ギヤスケル全集 別巻I——短編・ノンフィクション』（2008）、『ギヤスケル全集 別巻II——短編・ノンフィクション』（2009）が刊行されました。全集とこの別巻二冊の刊行により、ギヤスケルの作品のほとんどが翻訳されたことになります。2010年には、ギヤスケル生誕200年記念論文集『エリザベス・ギヤスケルとイギリス文学の伝統』（2010）を刊行しました。そして、ギヤスケル没後150年を迎えた2015年には、中編・短編を中心にした論文集『ギヤスケル没後150年記念論文集——エリザベス・ギヤスケル中・短篇小説研究』を刊行いたしました。本協会30周年となる今年は、引き続き大阪教育図書株式会社の多大なご協力を得て、「比較」の視点からの考察による論文集を出版予定です。また、2016年には、ギヤスケル協会の研究会の成果と言える『ギヤスケル中・短編小事典』（開文社）が、第三代会長の多比羅真理子氏編著として刊行されております。

大学においては英文学研究のみならず文学研究全体が困難な時代となっておりますが、ギヤスケルの作品のみならず、文学作品をとおして得られる経験はかけがえのないものです。日本ギヤスケル協会は、これまでの良き伝統を守りつつも、このかけがえのない経験を共有し、さらなる発展を目指して新たな試みに挑んでいく所存です。

（日本ギヤスケル協会会長、早稲田大学教授）